

総論

満点	200点	目標得点	135点	試験時間	120分	偏差値	65
大問数	2	小問数	60				
【解答形式】		選択式	60/60問	記述式	0/60問	論述式	0/60問
【問題難易度】		C	5/60問	B	39/60問	A	16/60問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：1000語を超える長文が2題出題され、この傾向に変化はない。
- 2：超長文において、文章を読解しながらの適語補充が20題、内容一致が10題。この出題形式も変化がない。
- 3：出題テーマは専門的な分野が出されることがあり、語彙レベルも高度である。

こんな力が求められる！

1000語を超える長文が2題。試験時間が2時間。まず集中力を2時間維持させることが何よりも重要である。

そのためには単語力が全てとは言わないが、単語力がないとこれだけの超長文を読解していく過程において、つまずく箇所が多くなり、前後の内容から意味を推測するといっても限界がある。したがって夏休み明けぐらいには『でか単』のPART3までをマスターすることが必要である。

そうは言っても知らない単語が出てくることも有り得る。そのような場合、細部にこだわらずに、全体としては何を言っているのかということ念頭において、先へと読み進める大胆さも必要となる。

時間は2時間あり、速読という言葉に振り回される必要はない。初回の読解を深め、何を言っているのかということパラグラフごとに整理しながら読み進める。つまり自分の頭の中で内容を整理して、全体像をつかむ力が要求される。

適語補充の問題については、長文だけだからといって文法力を無視しては正解に辿りつくことは出来ない。基本的な文法力は必須である。特にその際念頭において欲しいことは、従来の文法問題を解くというよりは、動詞の使い方（その動詞には目的語を取りうるのか、とかどのような前置詞との絡みで使われるのか）、類義語の整理などの知識を身につける必要がある。

内容一致に関しては、本文の内容から判断するものである。確かに出題された文章に対しての知識があれば解きやすいかもしれないが、必ず本文に内容を解き明かす箇所がある。したがってその部分を的確に把握することが必要である。対応箇所がわかってもその部分の内容がわからなければ、結局正解には辿り着けないので、やはり戻ってしまうが部分の理解とともに、全体として何を主張しているのかという全体像の把握する力が絶対に必要である。

環境情報学部は総合政策学部と出題の形式、内容ともに全く同じであるので、自分が受験する学部にこだわることなしに両方の学部の過去問を解き、超長文に慣れ親しむことが必要である。

【I】

予想配点	100/200 点	時間配分の目安	60/120 分
出題内容	長文問題 [Word 数] 1254 words [『でか単』『完熟』レベル] [『でか単』『完熟』ともに PART3 [長文テーマ] 経済成長と環境問題の展開		
出題形式	適語選択・内容一致(全てマーク)		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す [1] B [2] B [3] A [4] A [5] B [6] B [7] A [8] B [9] A [10] B [11] B [12] B [13] B [14] A [15] B [16] A [17] A [18] B [19] C [20] A [21] B [22] B [23] B [24] B [25] B [26] A [27] A [28] C [29] B [30] B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	O S 早慶英語を中心に、超長文を含む多くの英文に触れていく。また、難易度は高いながらも読解上必要な英単語の大半は『でか単』PART2, 3 に掲載されており、『でか単』の習得により十分本問題を解くのに必要な語彙力が身につく。		

●本大問の特徴・概要

長文中の空所を埋める三択問題が 20 問と、内容に関する問いが 10 問の合計 30 題。出題形式はこのところ変わりがなく、十分な過去問対策を行ってきた受験生が報われる傾向が続いている。確かに文章は長いが、60 分かかれることを考えると時間的に苦しい構成とまではいえない。速読力が求められている、というよりも、長い文章をいかに論理的に読み解いていくかという読解力が求められているといえる。

長文のテーマは、経済成長とそれに伴う地球環境問題の解決の難しさについて。近年の入試問題でよくあるタイプのテーマではあるが、例年のことながら語彙のレベルが高く、読みやすいということは全くない。

●注目すべき小問

確かに語彙のレベルは極めて高く、空所補充の三択問題でも、およそ受験生の大半が知らないのではないかという単語が解答になっているケースもあるが、本問に登場する英単語全てを知らないと合格点を勝ち取れないというわけではない。例えば[9]。解答は 2 の *accommodate* 「収容する」であるが、仮にこの単語を知らなかったとしても（もちろん、知っていてほしいし、知っておくべきなのだが）、他の選択肢である *accelerate* 「加速させる」と *encourage* 「促進する」を文脈上除外することができれば、正答に至ることができる。三択問題は意味が重なったり、文脈上、肯定と否定と逆転しているなどの観点から消去できるものも少なくないため、これらの問題でしっかり得点していきたい。

また、派生語や接頭辞・接尾辞の知識も極めて有効である。[6]の解答である *unprecedented* (『でか単』PART2 掲載の *precede* 「先行する」から来ている)や、[10]の *inhospitable* (『でか単』PART2 掲載の *hospitality* 「親切にもてなすこと」から来ている)などは、元の単語から類推する力が求められているということもできるだろう。

いずれにせよ、本学部の入試問題では、単に意味を知っているだけでなく、より深い意味での語彙力の習得が不可欠である。

【Ⅱ】

予想配点	100/200 点	時間配分の目安	60/120 分
出題内容	長文問題 [Word 数] 1214 words [『でか単』『完熟』レベル] [『でか単』『完熟』ともに PART3 [長文テーマ] 礼節と文明		
出題形式	適語選択・内容一致(全てマーク)		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す [31] B [32] A [33] A [34] B [35] A [36] B [37] A [38] B [39] B [40] C [41] C [42] A [43] C [44] B [45] B [46] B [47] B [48] B [49] B [50] B [51] B [52] B [53] B [54] B [55] A [56] B [57] B [58] B [59] B [60] B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	○ S 英語クラスに在籍し、1000 語以上の長文を読みこなす訓練を積んでいることが望ましい。		

●本大問の特徴・概要

【1】と共通した三択の空所補充問題と段落や文章全体に関する読解問題で、いかに迅速、正確な読解を最初から最後まで持続できるかが鍵となる。受験英語が持っているはずの制約を(さすがにしいまに)意に介さないような、入試問題の中でも最高度の語彙の難しさ、文章の長さ、内容の硬質さから、ともすれば地に足のついた判断を失いかねないが、きちんとした文法と語彙の知識、文脈把握と段落別読解を駆使して問題にあれば、解法の手がかりが見つかる場合が多い。

文章のテーマは問いにもあるように礼節と文明であるが、とくに古代から現代に至るまでの文明＝礼節と野蛮＝闘争との関係性が焦点となっている。文明は礼節によってみずからが強い抑圧という事態を隠蔽しようとする。それに対し、例えば公民権運動を指導したキング牧師は、民主主義を尊重しつつ、(非暴力的)「公民的不服従」の態度を貫く。論者はそのような態度に共鳴するにとどまらず、最終段落においては市場原理に走る現代文明に対する批判にも及んでいる。けっして難解ではない明晰な展開で、いわば西洋的「忠誠と反逆」を論じており、その意味で一読に値する。

●注目すべき小問

- [31] concerned 直後の前置詞の選択。for, about, with いずれもつくことがある。ちなみに『完熟』PART 2, 3 には、be concerned about[for]～は「～を気遣っている、～を心配している」、be concerned with～は「～に関わっている、～を取り扱っている」とあり、日頃の学習が定着していれば解答に迷うことはない。
- [34] evaluate 「価値を見極める」のか upgrade 「価値を高める」のか、迷うところ。しかし、段落末尾に述べられていることから、civility の価値を見極め、評価するという主旨が述べられているはず。
- [38] [39] 文脈的に各選択肢を含む文は同様の意味をもつことを考えるのがヒントとなる。cover 「覆い隠すもの」、mask 「覆い隠す」という選択肢を選ぶヒントになる。
- [40] in power で「権力を握った」(⇔ out of power)。
- [41] in dissent で「反対して、異議を唱えて」。「異議を唱えつつ愛する」という両義的概念を述べようとしていることが直後の This civil disobedience 「この公民的不服従」という受け方から推測できる。
- [43] 同様の文脈で、やはりキング牧師の態度に表れていた両義性が表現し直されている。対話は(相互理解などではなくその反対の)意見の不一致からこそ生じるのである。
- [50] (市場的価値が社会生活に進行するのを) be allowed to do 「容認されている」のか、be conditioned to do 「定められている」のか、迷うところ。同段落内の直前の展開では、私たち自身の考え方や行動様式が述べられているので、やはりここでは(市場主義社会の宿命として定められているのではなく私たち自身によって)「容認されている」と考えるほうが適切である。